

海 (かいし) 市

No. 40

● 詩

- 02 横山 仁 生活の柄 (33)
04 前田 勉 ある季節に (3)

● エッセイ

- 08 細部俊作 本をひらく (5)
11 佐藤ただし 水田とツバメ (38)
14 横山 仁 雑記 (40)

生活の柄(33)

横山 仁

第十六回「ピッタの会」(矢代レイ氏主催)の資料の詩に三好達治「土」があり、「蟻が／蝶の羽をひいて行く」のルビは、あり、ち・よ・う・だ・つ・た。旧仮名遣いだと、てふ(安西冬衛「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」ではないのかと矢代氏の『三好達治詩集』(新潮文庫?)をみせてもらったがそのとおりだった。帰宅後、現代詩文庫『三好達治詩集』(思潮社)ほかをみたが、それらにはルビはなかったから、文庫本ということで読みやすくするためルビをふったのだろう。ちなみに、三好の四行詩について中村真一郎氏は「当時、民衆詩派の粗雑さ

と、西欧前衛詩の直輸入との両方から、崩壊に瀕していた日本の近代詩を、もう一度、放恣な崩壊から食いとめて、新しい詩形を発見しようとする三好氏の多彩な努力^{*1}と解説している。戦争賛美の詩人だけじゃなかったんだと興味をおぼえた。

そうおもっていたところ、『露月365日〈春季・夏季編^{*2}〉』に露月の句「てふくくや何に集る庭の春」が紹介されていて、その解説に、「蝶々」は、明治十四年に編集された『小学唱歌 初編』に収められていて、「ちようちよ ちようちよ」とあった。なお、『日本の詩歌 別巻日本歌謡集^{*3}』では、「ちようちよう ちようちよう」となっているが、原本（国会図書館蔵）は「てふくく てふくく」であった。

*1 『近代の詩人 九 三好達治』（潮出版社）

*2 露月研究会

*3 中公文庫

ある季節に（3）

前田 勉

あたためられた風が
草いきれを抱え込んで
河川敷の堤防をゆるやかに
かけのぼっている

草原くさはらを波立たせ
葉裏に光をまき散らしながら
堤体をジャンプ台にして

たかく
高く
吹きあがって

遠い日

高台の海の家から

キラめく大海原への滑空を夢見ていた

夏

言葉にする術も知らず

内向していた意識をふり切るように

ただひたすら

しお風をはらみながら

反射する光のなかを滑空したかった

季節

光

拡散し続ける中で

溶け込んでいたか

あのとき

河川敷の

あたためられた昼前の風が

つぎつぎに身体に絡みついては

思い起こした記憶を奪い取って

逃げていく

堤体の裏側に隠れて見えない

まち並みへ

とんでいく

本をひらく (五)

細部 俊作

「灯台へ」

(ヴァージニア・ウルフ作 鴻巣友季子訳)

この小説は「意識の流れ」とか「内的独白」という言葉で評されていることから、うつうつとした小むずかし気な小説かと予想していた。しかし読んでみると、内的独白以外にも声に出して話しかける、応じるなどやりとりする場面や、回想の中でだれがこう語ったなどと引き合いに出す部分もあって、木の葉のようなとか星屑のようなとか数々の思いを言葉にして、登場人物がそして読者である私らが暮らしていることを思った。

舞台となるのはスコットランド北西端のスカイ島。

十一人家族とそこに集った人たちとの交わり、互いへの好奇心や人生観、光や陰で彩られる風景描写など、惹かれるところが多かった。物語は九月のある一日と、十年後のある一日という二日の出来事であることも特徴になる。物語に大きな起伏はなく、第一部ではディーナーでの語らい、第三部では灯台へ向かうラムジー氏と、カンバスを前にして思索を重ねる画家リリーの独白が中心になっている。

第一部の主人公はラムジー夫人だといってもいいと思う。家族を愛し、聡明でよく見ると美貌、九人家族の家計を切り盛りし、地域の困窮する人たちに積極的にかかわるなど社会に向ける関心も高く、灯台守の病気の息子のための靴下を編んでいる。ヨーロッパが第一次世界大戦のさなかという時代でもあって、「あの子たちには、いまほど幸せな時期はもう訪れないでしょう」「この世には理性も秩序も正義もなく、苦しみと死と貧者があるのみ」「世の中はどんな卑しい裏切りもためらうことなく遂行する。永らえる幸せなどありはしない」とこの先の社会をきびしい眼差しで見

ている。ほぼ一〇年経ったいま、報道される世界のありさまに気持ちが飛んで、暗い気持ちになる。

夫人は家族やほかの人たちに起こる小さな事柄にも喜びとか憂いを感じる人だ。その日、彼女が友人たちも呼んで開いたディナーが、だんだん和やかになり、盛り上がってくると、夫、子どもたち、友人たちの内側から沸き上がった親しみ深さが行きわたっていく様をみて幸福を感じる。このディナーが、子どもたちの心に永遠に刻まれるだろう、と満足感に浸る。この場面は印象に残る。

夫人の夫ラムジー氏は、子に対しては厳格で独善的。末っ子はこの父親を毛嫌いしている。ラムジー氏はやりてで非の打ちどころのない夫人に対して一目も二目もおいていている。世間に対して承認欲求が強いのは、夫人の人間的な魅力に対して、自分の無力さを卑下する傾向があるからなのだろう。夫人が陽なら夫の方は陰という対比か。強引、寂しがり、自己陶醉、自己憐憫、小心、不安定。一方で、彼は強烈なオーラを発しているのか、幾人かの人物は彼からかなりプレッシャーを感じている。人は一言で言いつくせない多面

性をもっているものです。それでも、彼が夫人を限りなく大事に思っている様子は目に見えるようだ。

第二部になると、登場人物の三人があっけなく他界していた。三人の死は簡素にふれている程度だから、小説家というのはいともたやすく人を死なすものだ。この十年間、他の人たちはどうしていただろうか。彼らは皆この島を離れたが、それは大戦の影響があつて本来の住まいに戻らざるを得なくなったからだと思像した。過ぎ去ってみると、時がすべてを吹き払ってしまったような印象だ。

第三部では、十年後に再びこの島に還ってきた数人が登場する。ラムジー氏は以前に比べ心変わりしたのか灯台へ向かう。これは、夫人が編み終えた靴下を灯台守の息子に渡すためではないだろうか。ボートのなかで、末っ子（一六歳。前号で挙げた山極さんのいう「思春期」になった）の心にこれまで凝固していた父への不穏な思いは溶けていくようだった。別荘に帰ったら、皆でつましい夕食を囲むのでないか。読者としては、それが親密な会話のあふれるテーブルであってほしい

と願う。

ラムジー夫人の人間性に魅了され、心酔している画家のリリーは、夫人の生き方や姿、ふるまいなどの思ひ出が脳裏にあふれてしまい、絵画制作に没頭できないでいるようだ。行き詰まりから抜け出すために、大いなる天啓、日々のささやかな奇蹟と光明（平たく、天から降りてくるひらめき）といえるかもしれない）の到来を待ち望んでいる。

この小説は、リリーが「自分のヴィジョンをつかんだ」というところで終わるが、この意味も分かりづらい。絵との向き合い方を納得した」という意味で、それがひらめいたということだろうか。彼女が受け取ったひらめきというのは、思うにカーマイケル老人の存在から得たのではないか。この老人は皆のいる場面の片隅に、目立たないが必ずいて、ときにその場を横切ったりする。ラムジー夫人は彼を苦手としている。そして、不思議なことにこの老人だけは、何かを独白することはなかった（ように思う）。それはどうしてだろう。また、この小説の地の言葉（ナレーション）はだれがしているのか、作者か？ 実はカーマイ

ケル老人ではないのか？

そんな謎につき合ってしまうと、それを解くヒントを探しに再び読み返したりしていた。こんなふうでは、いつになっても次の本が読めなくなる。しかし、それも小説を読むことの面白さではないかと思っている。

原著は一九二七年刊。鴻巣訳は『灯台へ／サルガッソーの広い海』（二〇〇九年河出書房新社）があり、そのなかから『灯台へ』を二〇二四（令和六）年十月新潮社が文庫化した。

水田とツバメ（三八）

佐藤ただし

・ L i f e F o r c e の 入 り 口

海市三八号に八〇代の老夫婦が作っていた沢の田んぼのことを書いたが、老夫婦は昨年で田んぼを作るところをやめ、私が加入している農事組合法人が一〇枚の田んぼのうち七枚を作ることになった。残りの三枚のうち、一枚は別の農家が作り、あとの二枚は五月の末段階でまだ耕作されていない。そして今年は七枚の田んぼの世話を私がすることになった。そのため春先から何度か沢へ足を運んだ。

沢の田んぼは山あいの中にあるため、雄物川の流域に広がる平地の田んぼとは違う印象を受ける。集落から離れてゆくに従い人の気配が消え、田んぼを取り巻

く山の樹々は凜として枝を広げ、山全体に気力が満ちている。

この沢に広がる静かな佇まいは、外から入ってくるものを静かにさせるような樹木の存在感があり、側溝を流れる水の音までよく聞こえる。田んぼもその脇に作られた農道も地形に合わせて折れ曲がり、里山の景色の中に納まっている。

こうした沢の田んぼはいづ頃作られたものだろうか。

秋田県立図書館で四月一日から特別展示されていた「稲穂の詩〜秋田の米づくり〜」を見る機会があったが、それによると、東北地方は弥生時代の遺跡が少なく、秋田県では水田遺構はまだ見つかっておらず、縄文時代の晩期に日本に伝わったとされるイネ作りが秋田で広く行われるようになるには更に長い時間がかかったようだ。狩猟採取や焼き畑の時代に生きていた人たちにとって、田んぼを作ってイネを育てるという技術は革命的な出来事だったに違いない。日本で新田開発が最も盛んだったのは江戸時代だと言われているが、こうした山あいに田んぼが作られたのは比較的新しいことなのかもしれない。

この沢の水田面積は約二・二ヘクタールで、周囲を低い山の山林が取り巻くようになっていたが、昨年まで田んぼを作っていた親父さんが今年も排水路の周辺や農道、そして山の法面までも草刈りをしていくっている。ここには田んぼの脇に作られた農道のほかに山の脇に作られた林道もあり、一〇メートル位の間隔で若い桜の樹が数本植えられている。その林道の草も刈られていて、よく見ると今咲いている野草は刈らずに残してあるため、田んぼのある自然公園のような景色だ。五月の初めにここで親父さんに会った時に少し話を聞かせてもらったが、田んぼのそばにある山の一部はこの親父さんの家の山で、農機具などを入れている納屋もあり、よくここへ来ているようだ。

この沢の中にいると納屋からひよつこりと老子が出てくるよう雰囲気だ。この一帯を作ってきた親父さんが「道」を体現しているのだらう。加島祥造の「タオ」の第一章を思い出す。

L i f e F o r c e の入り口

これが道だと口で言ったからって、それは本当の道ではないんだ。

これが道だと名付けたからって、それは本当の道ではないんだ。

なぜって、それが道だと言ったり、

名付けたりする君自身が道にふくまれるからだ。

人間が名付けるすべてのものや、

物を知ったと思う人間たちのむこうに、

名もない道の領域が、はるかに広がっている。

その名のない領域から

まず天と地が分かれば、

天と地の間から

数知れぬ名前が生まれて来たというわけなんだ。

だから、この名のない領域。本当の道を知るためには、

には、

欲を捨てなければならない。だって

名があれば、そこに欲が生じるからさ。

人というのは、名のあるものに欲を起こすんだ。

名のない神秘の世界と、

そこから出た数知れぬ名のあるもの――

このふたつは、同じ源^{みなもと}から出てくる。

名がつくことと、つかぬことの違いがあるだけさ。

名のつかぬ領域。それは闇に似て

暗く、はるかに広がっている。

そのむこうにも、暗くはるかに広がっている。そ

のむこうにも――

それを宇宙の神秘と呼んでもいい。

その神秘をわけて行く時、

人は本物のいのち、Life Forceの入り

に立つのさ。

(タオ…ヒア・ナウ 加島祥造訳) (注)

五月半ば過ぎにこの沢の田んぼの田植えを行なった。

田植機のオペレーターや軽トラックで苗を運ぶ人、使った苗箱を洗う人など、総勢七名で沢に向かい、麓から順番に田植えをしていた。私はレーキというアルミ製の均し棒のようなものを持って田植機が旋回するときに出来るタイヤの跡を消したり、苗を持って田植

機で植えられなかった場所の穴植えなどを行った。

沢の七枚の田植えは五時間ほどで終わった。ここに植えられたイネの苗は、山を流れる風や水の音を聞きながら育つことになる。私もそうした光景に接しながら秋の刈り取りまでイネと共に過ごすことになる。

(注) この「タオ…ヒア・ナウ」のあとがきを読むと

加島は英訳された老子道徳經を和訳してほしいという依頼を受け、この本が出来たようだ。そのため第一章のLife Forceの入り口というタイトルは英訳された本のタイトルを参考にしたものかもしれない。また、王明という人が校訂・訳した「老子(全)」は第一章から八一章までであり、原文(漢詩)と訳が載っているが、原文にはその章ごとのタイトルはついておらず、訳の第一章は「不思議の不思議」というタイトルがついていた。

土台が見える。(鉄骨の上端も不自然に平坦。)]

雑記 (40)

横山 仁

目からウロコだったのは、「新日本文化チャンネル桜」の【今、世界はどうなっている？】林千勝

×水島総 第39回「ウォール街ともデイトールする
トラソブ、一方日本はグローバルリスト特区に？」

(桜 R 7 / 3 / 15 <https://www.youtube.com/watch?v=18rRdbJDPNM&t=5634s>)。林千勝氏が原爆のことを取りあげ、日本に落とされたのは、原爆ではなかったという。

たとえば、ニューメキシコ州 (1945年7月16日) でのトリニタイ実験。「地上約30メートルの爆発では、火球の内側であり、30万度以上。鉄は蒸発していたはず。」なのだが、「実験後すぐにクレーターを掘り起こす作業の写真では、アツアツになると、四隅に鉄骨の

また、広島でも、原爆ドームのそばの樹木が残っていたが、アレクサンダー・セザンヌ氏 (ロシア系米国人で航空界のパイオニア、米軍の爆撃破壊効果の専門家。日本主要都市および広島・長崎を調査訪問 [8月後半か]) の報告？を紹介している。

「構築された都市では、たとえ浅いクレーターであっても、急遽ごまかしたり、偽造したり、掘ったりするのは難しいかもしれません。」

「木々は、たとえ何もしなければ、地表からほとんど一掃され、蒸発し、爪楊枝のように飛び知るだろうと予想されるだろう。しかし、かなりの数の植物が直立したままであっただけでなく、実際、翌年再び開花します。」

「被爆樹木とは、1945年8月6日の原爆投下で生き残った樹木のことです。爆心地から半径2km以内の55カ所、約170本が広島市によって正式に被爆樹木として登録されています。」

広島市役所調査課のデータでは、

「爆心地近傍 (0～500m 以内 2500 度～4000 度)
に 1946 年 8 月 10 日時点 軽症者 338 人 無傷者 924
人」

「爆心地近傍 (170m～500m 以内 2500 度～3000 度)
に居た 1968 年時点 生存者 78 人以上 (隠せず)」

「証言 『光も音も感じなかった』『何も見えず、音
も感じなかった』→太陽のような巨大爆発・火球や大
閃光は無かった！ 『私は火傷も怪我もありませんで
した』」

■陸軍省広島災害調査班第 2 次調査班 (8 月 14 日
広島での調査開始) 速報第 9 号

「現在の所、被弾地区に生活する事により直接被害
を受けるものとは思われず」

■日本政府によるアメリカ占領軍への原爆被害調査
報告書 第 2 部「広島破壊の報国 (放射能に関して)」
(8 月 15 日付、9 月 3 日にマンハッタン管区調査団 (横
浜) へ提出)

「一、爆心地中心の周辺には人体に被害を及ぼす程
度の放射能は存在していない。

二、練兵場 (爆心地から約 300 m) では野菜の栽培
が可能であることは強い。」

そして、林千勝氏は述べている

「『原爆』の不都合な真実の解明へ」

1. 専門家モードの枝葉の議論や洗脳による隘路に終
始することなく、まず、火球直下の木々が蒸発せず、
樹皮も存在していることを直視。そして、膨大な分量
になるが多面的な説明を尽くすことに努める。

2. 地上起爆説等、根拠なく米軍の責任を回避する議
論に囚われない。

3. 例えば、東京大空襲は米軍によるものではないな
ど突飛な議論を寄り添わせる陰謀論的な印象操作に関
知しない。

4. 被害者の方々の大変な苦しみを共有し、より広範
で納得的な支援の枠組みを求める。

5. 一般国民への史上稀にみる毒ガス等による大虐殺
を糾弾し、偽装を暴くことは日本国民としての当然の

行いと考える。

余りの衝撃に俄かには受け付けがたい気持ちを持たれる方々には、この番組シリーズを続けてご視聴いただくことをお勧めします。

このあと100倍以上の分量の証拠を出していく予定です。」

番組の中では、原爆ではなく、複数のナバーム弾、毒ガス弾（マスタードガス）、閃光フラッシュ弾、雲を発生させるサーモニックス弾（？）だったのでは、と述べているし、内臓障害、脱毛などは、毒ガス弾の症状とおなじという。

なお、東大の博士も、8月に、これは偽の原子爆弾といっているとのこと。被害者認定が困難なもの、原爆が一発ではなく、多量のナバーム弾などが各所に落とされたからといわれる。

このほか、SakuraSoTVでは、「続・世界最大のタブーに迫る『原爆投下』の真相【これが本当の近現代

190] (3 months ago)。また、ChGrandoStrategyでは、「米極秘文書から紐解く原爆投下の真実」(1 years ago) などが放映されているが、未聴。「雑記」を書き終えてからみる予定。

このYouTubeの動画では、東京大空襲との比較もなされているが、これに関して、深田萌絵氏が東京大空襲では、皇居や財閥等は被害を受けていないといっていたので確認したところ、「長周新聞」の記事にあったので、紹介する。(岩波新書の早乙女勝元著『東京大空襲』が見当たらないため) 【記者座談会】語れなかつた東京大空襲の真実——首都圏制圧のための大虐殺 130回の空襲で死者・行方不明者25万人」(2015年10月2日)

<https://www.chosyu-journal.jp/heiwa/1134>

(引用開始)

無傷だった皇居、財閥、軍施設



米軍による東京大空襲で道路に横たわる焼死体（東京・本所）

司会 東京での原爆展キヤラバン活動では、都民から東京大空襲の体験が堰を切ったように語られた。一晚にして10万人が殺された世界的にも類を見ない大惨事であったにもかかわらず、70年目を迎える今も公の慰霊碑も記念館もないことを痛切に訴えてくる人が多かった。東京都民から語られた経験と切実な思いから出してみたい。

A 東京空襲について、一般に死者10万人といわれるが、真珠湾攻撃から5カ月後の1942年4月の最初の空襲から、最も被害の大きかった1945年3月10日を含めて終戦の日まで130回以上もの連続的な空襲がおこなわれ、東京都の調査資料には、死傷者・行方不明者は25万670人、罹災者は304万4197人と記録されている。犠牲者の数だけ見ても広島・長崎、沖縄戦をこえる規模だ。

とくに3月10日の大空襲のように、たった2時間余りで10万人以上を殺すような空襲は世界中で後にも先にもない。イラクやシリアどころではない惨劇だ。

それが「これまで語ることができなかった」といわれる。公的な慰霊碑も記念館もない。

(引用終わり)

*

また、アズゾンのブックレビューから。「近現代史研究家・林千勝氏の推薦で購入しました。本書を通じて、原爆捏造と戦後の洗脳を理解し、現代における情報操作やメディアの影響を直視する必要性を痛感しました。」というのは、『偽装された原爆投下』。

『偽装された原爆投下 広島・長崎原爆の物理学的・医学的エビデンスへの再検討』は2023/9/26に福村出版から刊行されている。ミヒヤエル・ノバルー(著)、原田輝一(翻訳)

以下、アズゾンから目次を紹介する。

(引用開始)

広島と長崎に投下された爆弾は本当に原子爆弾だったのか？ 歴史は常に史実なのか、なぜ偽装する必要がある

あったのか、科学的エビデンスへの徹底的再検討から
歴史的背景を探る。

【目次】

本書を読まれる方へ——訳者によるナビゲーション

第1章 なぜ広島と長崎への原爆投下を疑うのか？

1 節 広島の破壊状況についての専門家の証言

2 節 消えたウラン

3 節 爆撃の目撃証言

4 節 あの日、本当は何が起きていたのか？

5 節 犠牲者におけるエビデンス

6 節 本書の構成

第2章 電離放射線と放射能についての基礎知識

1 節 原子とその構成粒子

2 節 化学結合と分子

3 節 放射能

4 節 電離放射線と物質の相互作用

5 節 核分裂

6 節 放射能や核分裂とは無関係な電離放射線

7 節 物質による電離放射線の減衰

8 節 電離放射線の測定

9 節 放射線量

10 節 核分裂爆弾によって放出される放射線の形

態

11 節 生物学的放射線効果

第3章 広島と長崎での核爆発による放射性降下物

1 節 土壌サンプル中のウラン同位体

2 節 原爆投下直後に採取されたサンプル中のセシウムとウラン

3 節 広島 of 放射性降下物地域の土壌サンプルにおけるセシウムとプルトニウム

4 節 広島 of 放射性降下物における同位体比のばらつき

5 節 長崎近郊の西山貯水池から採取された堆積物中のセシウムとプルトニウム

6 節 爆弾製造可能なウランの濃縮——それは1945年に可能だったのか？

7 節 最初の核爆発テストは、本当にプルトニウム爆弾だったのか？

比較研究	
8 節 結 論	
第 4 章 残留放射能の初期測定	
1 節 初期の現地測定における時間経過と結果	5 節 新しい改訂推定値——最終的にすべてが適切に収まる
2 節 清水による硫黄の放射化測定	6 節 作為された世代モデル
3 節 結 論	7 節 結 論
第 5 章 熱ルミネッセンス（熱発光）による γ 線量測定	第 7 章 硫黄マススタートとナパーム
1 節 熱ルミネッセンス測定の校正（キャリブレーション）	1 節 物理化学的性質
2 節 信号の形状と安定性	2 節 作用機序と毒物動態
3 節 爆弾と火災の熱によるサンゾルの不活性化	3 節 臨床的・病理学的症状
4 節 報告されている発光データの評価	4 節 ナパーム
5 節 結 論	第 8 章 広島・長崎における急性「放射線」障害の統計学的観察
第 6 章 中性子線のエビデンス	1 節 物理学的前提
1 節 T65D および DS86 線量評価方式による中性子線の線量推定値	2 節 急性放射線障害の症状
2 節 低エネルギー中性子による誘導同位体の測定値	3 節 広島・長崎での急性期放射線量
3 節 硫黄の活性化の測定値	4 節 広島で観察された ARS の距離分布
4 節 コバルトとユーロピウムの放射化についての	5 節 長崎で観察された ARS の距離分布
	6 節 コンクリート建物に遮蔽された人の ARS 症状
	7 節 原爆投下後に広島市内中心部に入った人の

ARS

8 節 遅発性 ARS

9 節 ARS の症状と公式放射線量推定値

10 節 ARS の初期症状としての下痢

11 節 フアラオたちの呪い

第9章 生存者における熱傷

1 節 熱傷の分類

2 節 広島・長崎での熱傷に関する統計的観察

3 節 即発性熱傷と遅発性熱傷

4 節 ナハーム熱傷のエビデンス

5 節 バスタードガスによる化学損傷（熱傷）

6 節 付録——皮膚への閃光熱傷実験

第10章 被爆者における初期の臨床所見と病理的所見

1 節 初期死亡者の臨床像

2 節 急性網膜熱傷——不自然にも広島と長崎の原

爆では発生しなかった

3 節 その他の急性眼病変

4 節 肺

5 節 頸部臓器

6 節 消化管

7 節 その他の臓器

第11章 被爆者を対象とした研究で使用されている推定放射線量

1 節 原爆傷害調査委員会（ABCC）

2 節 個々の線量推定値の設定

3 節 放射線量推定値と ARS 症状との相関性

4 節 線量推定値と体細胞染色体異常

5 節 DS86 線量推定方式

6 節 結 論

第12章 長期生存者における疾患

1 節 胎内被爆者における先天性障害と悪性疾患

2 節 癌と白血病

3 節 癌以外の長期的疾患

4 節 結 論

第13章 爆撃はどのように行われたのか？

1 節 見せかけの核爆発

2 節 通常兵器による攻撃とその隠蔽

3 節 日本側の共謀

4 節 検閲とプロパガンダ

5 節 特殊効果

6 節 核爆発を否定する追加エビデンス

第 14 章 なぜ原爆投下を偽装したのか？

1 節 目的は日本の降伏ではなかった

2 節 原爆捏造の目的は、スターリンを脅すことではなかった

3 節 テロ行為としての原爆投下捏造

4 節 近代史における二つの対立する見解

解説 隠された人間性とは社会原理、そしてそれに向き合う勇氣

〔原題〕 Hiroshima revisited: The evidence that napalm and mustard gas helped fake the atomic bombings

〔著者紹介〕 ※初版刊行時のものです

ミヒヤエル・バルマー (Michael Palmer)

医学博士・科学ジャーナリスト

1961 年、ドイツ (シュレスヴィヒ・ホルシュタイン

州) 生まれ。ドイツのエストゥス・リービッツヒ大学ギーセン校医学部卒業。ヨハネス・グーテンベルク大学での博士号取得と微生物学教室勤務を経て、カナダのウォータールー大学化学部の生化学教授を 20 年間務める。2022 年に同大学を退職し、新たに科学ジャーナリストへ転身、歴史的出来事を含めてさまざまなテーマに取り組んでいる。広島と長崎への原爆投下にはいまだ解決を見ない謎が多数あることが、本書を執筆する動機になった。現在、COVID-19 に対する mRNA ワクチン技術に潜んでいるリスク分析に注力している。
(引用終わり)

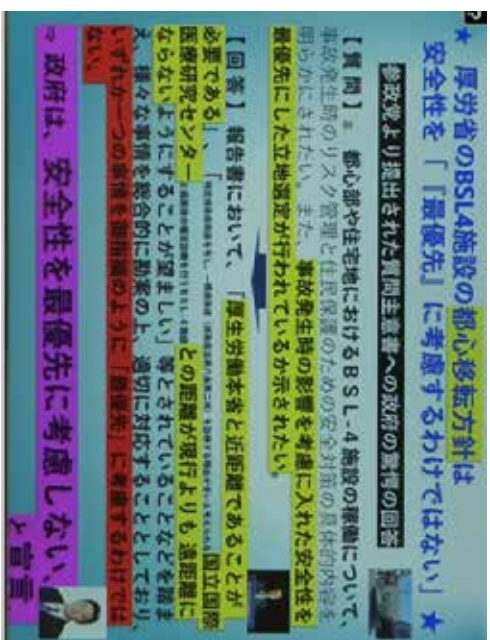
*

この番組では、エボラ熱のことも紹介しているが、政府のお粗末さかげんは、ひどいもんだ。安全性も確認されていない殺人ワクチンごり押しからもわかるように、「今だけ、金だけ、自分だけ」で、国民の安全など、1 ミリもかんがえていない。

長崎大学高度感染症研究センター長・森内浩幸というのは、悪名高いアンソニー・ファウチの弟子だったという。ファウチの恩赦も、バイデンのオートペンの



調査次第では、半屋行きかも。それが『人類を裏切った男』(ケネディ・ジュニア)にふさわしい。



あとがき

◆前農水大臣の失言、小泉進次郎の農水大臣就任（小泉首相への道）、すべてシナリオ通りで、このまま郵政民営化と同じように、J Aも解体されて農協マネーがアメリカ・ウォール街にぶんどられてしまうのだろう。米の販売も外資にのっとられて、配給制になるかも（J）

◆理髪店でどのくらいカットするか聞かれ、1センチくらいと答えた。終わってみると切り足りなかったの、もうちょっとだな、切り過ぎないように、といった。終わってみると、まだ切り足りなかった。ただ、今度言えばきっと切り過ぎるぞ、と思ったので、いいな、ちょうどいい具合だ、といって自分をごまかした。（S）

◆20年以上利用していたNT*系列のプロバイダーがドコ*光に吸収された途端、多くの内容が廃止され吸収元への勧誘が始まった。メールの不安定から始まり、今度は同系列のgo*ブログを11月に閉鎖するという。ようやく2桁後半に近い相手先へのメール変更を済ませたばかりなのに……。ブログはこれを機に止めようか、他へ移転しようか。Win11と共に煩雑な作業を思うと気が重い。今の時代、自動で変換処理できないものか。（B）

◆秋田県立図書館で行われていた特別展示展で、冷害に強い品種の開発に携わった仁部富之助を紹介するコーナーがあった。仁部富之助は秋田県由利本荘市の生まれで鳥の研究家としても知られ、「野の鳥の生態」全5巻にまとめられている。若い頃、会社の先輩に勧められて読んで記憶に残っているツバメのことなどを思い出した。（T）

「海市」 第40号

2025年6月11日発行（入梅）

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方